

在日ベトナム人が 住みやすい社会をめざして



ハ・ティン・タン・ガ Ha Thi Thanh Nga

NGOベトナム in KOBE代表

ハ・ティン・タン・ガ●ベトナム南部ベンチェ生まれ。1981年、インドシナ難民として日本の長崎に来る。日本語の勉強のため姫路定住促進センターに入所。香川県で半年過ごしたあと、84年から神戸のケミカル産業で働く。95年の阪神・淡路大震災後、仕事をしながらボランティア活動に携わる。97年より神戸定住外国人支援センター勤務を経て、2001年に設立されたNGOベトナム in KOBEで事務局長、03年4月から現職。現在、神戸市に在住、5児の母

NGOベトナム in KOBEは神戸を活動基盤として、在日ベトナム人の支援を行なう団体である。事務所を訪問する人の数は毎月約150人。全国から寄せられるさまざまな相談ケースは毎月約100件。相談の形式は、面談、電話、電子メール、ファクスなど、さまざまである。日本ではこのような団体が珍しいため、支援を求める在日ベトナム人のほか、報道機関、研究者、学生などからも注目され、非常に忙しい日々を送っている。

阪神・淡路大震災後の 被災外国人の支援

私は1981年にインドシナ難民として日本へやってきた。定住後、香川県のジーンズの会社で仕事をしたが、半年後には靴会社が多い神戸に移り住み、子育てをしながら働いてきた。83年ころの神戸には、ベトナム人は数名しかいなかった。

95年1月17日、阪神・淡路大震災が起きた。会社が潰れて、しばらく失職している間、カトリック鷹取教会(神戸市長田区)でボランティアとしてベトナム料理の炊き出しを手伝った。ここで起きた出来事が私の人生を変えた。

↑10月7日、NGOベトナム in KOBEの事務所で開かれた中秋節を祝う行事には、神戸を中心とした在日ベトナム人、日本人が多く集まり、楽しい交流の場となった
写真提供：NGOベトナム in KOBE (以下も同じ)

→「ベトナム食材・雑貨販売—SHOP」。事務所の一角に並べ、ベトナム食文化を紹介するとともに、重要な自己財源の一つにもなっている。相談に来たベトナム人が帰りに立ち寄るほか、最近では近くの日本人が購入に訪れることも



あるボランティアの方から、「料理教室を企画しているのだが、ベトナム料理を教えてほしい」と言われ、引き受けることにした。そこで出会った参加者のうちの数人は、ベトナムに対する関心度が非常に高かった。「私はベトナムのことなら伝えられる。何かしたいな」と思ったのが、きっかけだった。

被災者には、日本人だけでなく、数多くの外国人がいた。混乱のなか、必要な情報は日本語でしか発信されない。そこで、いくつかの民間団体が、被災外国人のための支援を始めていた。なかでも被災ベトナム人救援連絡会と兵庫県定住外国人生活復興センターは、震災情報を翻訳したり、多種の手続き（罹災証明書の申請、義援金の申し込み、仮設住宅の応募など）の支援を行っていた。

97年2月、この2団体が合併し、神戸定住外国人支援センター（KFC）に生まれ変わった。その際、日本語ができるベトナム人としてスタッフに、との依頼を受けたが、私にとつては未経験の仕事。随分悩んだものの、挑戦したい気持ちもあり、結局、スタッフとして働くことにした。

担当の仕事は、①避難所・テント村

での支援 ②情報提供、言葉の支援 ③行政との折衝 ④法律相談会の開催 ⑤生活相談 ⑥就職援助など、ベトナム被災者の支援だった。まったく経験したことのないことばかりで必死だった。何か吸い込まれるように夢中に取り組んだ。

支援を受ける関係から 自ら支え合う関係へ

KFCで4年ほど働いたあと、ベトナム人支援の部門を独立させて、2001年に「NGOベトナムinKOBÉ」を設立した。主な理由は、ベトナム難民が発生してから26年が経ち、「もう自分たちのことは自分たちの力で解決するべきではないか」と、皆が思うようになったからである。

私もそのころには活動に慣れてきていたとは言え、独立して一つの団体を運営することはとても考えられなかった。しかし、在日ベトナム人支援では先輩格に当たる団体からの応援やアドバイスの申し出もあり、私は「一人で歩むのではなく、仲間と一緒だ」と確信してスタートを切ることができた。

当団体の活動内容は主に2つある。在日ベトナム人を支援すること、そし

てベトナムのことを周囲の人に伝えることである。

まず、在日ベトナム人の支援では、生活相談の分野をKFCから受け継いだ。その内容は、子女の教育、賃金不払い、労災のトラブル、在留資格、薬物中毒などあらゆる種類の問題に関する相談、同行翻訳などである。無料かつ予約不要のため、在日ベトナム人からは好評で、毎月全国から約100件の相談がある。常にベトナム語ができるスタッフを置くことで、ベトナム人がいつでも安心して相談できる環境づくりをこころがけている。最近では、日本人からの相談も多くなっている。

次に、ベトナム人の高齢者支援事業を03年からスタートさせた。自宅に巡り回して健康に関する相談、病院への同行通訳、生活相談を行なっている。言葉の壁という障害があるため、高齢者の健康問題は命に関わる問題へとながる恐れがある。そのため、この事業には力を注いで取り組んでいる。ほかには、「お出かけ事業」として年2〜3回、日本人の高齢者との交流会、工場見学やぶどう狩りなどの遠足を実施している。

3つめは05年度から開始した「ベト

高齢者支援事業の一環として、外出する機会が少なく、外出するベトナム人の高齢者とともに、「お出かけ事業」として遠足を実施





4つめはベトナム人コミュニティにおける薬物防止キャンペーン事業である。近年、ベトナム人コミュニティでは、ヘロインの蔓延が問題となりつつある。この事業は05年度から始まったパンフレット、ポスター、ポケットティッシュ、うちわの作成と配布、薬物電話相談員の設置と薬物専用相談のホットラインの開設、医療機関への同行通訳の派遣、「神戸ベトナム人薬物当事者の会」の運営などである。依存者本人だけでなく、家族も支援をし、相談しやすい環境づくりにも心がけている。

子どもはベトナム語を、 母親は日本語を学ぶ

さらに、子どもの教育と言葉の習得に関する事業がいくつかある。母語教室は03年5月に開始した。毎週土曜日に90分間のクラスを開講しており、うち1時間はベトナム語学習、残りの30分はベトナムのゲームや遊び、歌などに親しむ。一時は4人にまで減った時期もあったが、現在、通つてい

る子どもたちは11名である。

一方、母語教室に通う子どもの送り迎えをする母親を対象にして、05年度から日本語教室も始めた。子どもは比較的的自然に日本語を身につけることができるが、母親は家にいることが多く、日本語を使う機会が少ない。現在4名が学ぶが、それぞれの学習レベルが異なるため、週1回マンツーマンで90分の授業を行なっている。

06年4月には、子どもの遠足事業を外部からの助成金を受けて始めた。「楽しむ」ことを第一の目的に、日本に来て間もないベトナムの子どもたちに出出させる機会を提供している。集団で電車に乗るときや食事をするときのマナーも習得させることができる。

このほか、ベトナム図書館の事業もある。ベトナム語の図書1500冊、雑誌700冊、日本語によるベトナム関連図書100冊を所蔵。ほとんどは寄付によるものだが、おそらく日本一の大きなベトナム図書館だろう。

小説、教育教材、そして雑誌は報道からファッション関連まで。マンガ本もシリーズ途中の巻がぬけていたりするが、たくさんある。現在、長田区内のNPO法人たかとりコミュニティセ

↑料理教室の一コマ。右は筆者、左はスタッフの打出真紀さん。スタッフは現在、ベトナム人2名と日本人6名で、いずれも学生か、本職を別に持ち、週1〜4日程度の出勤。日本人スタッフのうち5名はベトナム留学経験者で、覚えたベトナム語を活用している。もう1名はベトナムについて研究したい大学院生

←子どもの遠足事業。日本に来て間もないベトナムの子どもたちと外出。楽しみながら、集団行動やマナーの習得も



ンター内の事務所とKFCの二カ所所で蔵し、貸し出しを行なっている。最近、日本の学校から貸し出しの申し込みや日本人の利用も増えてきている。

最後に、通訳・翻訳事業では、面会や電話での通訳や同行通訳を行なっている。翻訳は、ベトナム語から日本語、日本語からベトナム語、どちらの依頼も多く、貴重な収入源になっている。

以上は、在日ベトナム人を支援することに関する活動内容だが、NGOベトナムinKOBでは、活動内容のもう一つの大きな柱に「ベトナムのことを伝えること」を掲げている。私はこれを活動の一環に入れるのは必要なことだと考えている。日本社会ではまだ外国人に対する偏った考えが残っている。ベトナムのことを伝える機会を提供し、日本人のベトナム理解を深めてもらいたいと思っている。

具体的には、ベトナムの伝統行事の実施、多言語コミュニティ放送局の「FMわいわい」での情報提供、ベトナム理解講座の開催に加え、地元イベントへの参加、屋台の出店、講演活動、研修者や見学者を受け入れなど、あらゆる機会を通じてベトナム情報の発信を実践している。

ニーズに応じて 拡がってきた事業内容

最後に、当団体が直面する課題をいくつか挙げておきたい。

まず、次の世代を育てるという点である。当団体には、ベトナムと日本の二つの文化に挟まれて悩んでいる子どもたちがよく訪ねてくる。進路や就職の悩み、親とけんかしたなどの相談である。難民の親は義務教育を終えたあとの子どもを学費を出す余裕がないため、ほとんどの子どもたちは自分でアルバイトしながら、学費を払っている。ベトナムと日本では子育てへの価値観が大きく異なる部分もあり、親子の間には溝が生じがちである。私だけでは力になれないことが多いが、子どもはただ「聞いてほしい」だけのようだ。

その彼らが少しでも当団体の活動に関心を持って、関わってくれればと思っている。しかし、彼らにも余裕がないだろうし、私たちにとっても彼らを雇う余裕がない。

次に、経済的自立性に欠けるという点である。発足後から現在に至るまで順調に黒字決算を記録し、財源も徐々に安定しつつある。現在、寄付金に加

え、通訳翻訳や講演などの事業が自己財源に当てられているが、今後、細かいニーズに合った事業内容の充実や拡大には、より安定した自己財源の確保が課題である。当団体の強みとも言える通訳翻訳などの事業内容に力を入れていくことが求められている。

5年間に行なった事業のほとんどは、在日ベトナム人のニーズに即し、自然の流れに任せる形でスタートし、取り組んできたものである。せつかなベトナム人に長期的な計画は合わない。必要を感じたら、そのときに事業に加えるべきというのが私の考えである。

現在、口コミで日本全国から在日ベトナム人の相談が寄せられている。相談内容も複雑化し、しばしば無力さを感じる。しかし今、私たちの力ですべてを改善しようとは思わない。消極的だと思われるかもしれないが、私たちには人材的にも経済的にも時間的にも余裕がないため、「今ある材料でできるものをつくるう」、「改善運動は余裕ができてから」と考えている。無理のない範囲で少しずつ活動を広げて、在日ベトナム人にとって少しでも住みやすい日本をめざしていきたいと思う。

(原文は日本語)